

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・奥山正樹

はじめに

昨年六月に新規指定された日高山脈襟裳十勝国立公園は、国定公園の指定面積を二倍以上に拡張し陸域最大の国立公園へと昇格させるものだったが、名称に「十勝」を追加することについては意見が分かれ、論争の経緯も報道された。その結果、残念ながら「長すぎる公園名」「観光振興のための名称」という印象を残してしまったことは否めない。国立公園の名称については、戦前から幾度も論争となつた経緯があり、本稿では過去の事例を整理しておきたい。

現在の国立公園名

現在の三五国立公園の名称をみると、文字数では最短が二、最長は八で、平均は四・二九である

(図1)。当初指定から現在までの文字数の変遷をたどると、最長、平均ともに着実に増加してきたことが分かる(図2)。

戦前指定の国立公園名

戦前に指定された一二公園については、国立公園法に基づき設置された国立公園委員会(以下「委員会」)の審議において名称も度々議論になった。当時の内務省は第七回委員会(一九三五)で、「国立公園の名称は区域内の最も代表的な地名や名勝による簡潔で味のある名称を理想とする」という方針を説明し、「様々な地元から要望がある長い名称は適当ではない」と述べている。

【中部山岳(一九三四)と吉野熊野(一九三六)】

第五回委員会(一九三四)では、候補地「日本アルプス」について、

西洋的な名称は好ましくない、外国人が付けた名称にすべきではないとの声が強くなった。

第七回委員会では内務省が、二候補地で唯一「吉野熊野」が二つ地域を重ねた名称で長い

ため、簡単に余韻のある名称の方が良いと述べた。これに対して「紀和」「畿南」などが提案される一方、二つの特色のある地域にまたがるため適切だという意見も多く出された。

一方、内務省に事務局を置く国立公園協会は、当局の参考に資する目的で、国立公園誌一九三三年一月号において、この二候補地を対象に「名称懸賞募集」を行った。応募総数は一万通を超え、四月の審査会を経て同誌六月号で発表された当選名称が「中部山岳国立公園」(三〇名)と「吉野熊野国立公園」(二二名)だった。

委員会内ではこれらにも趣がな

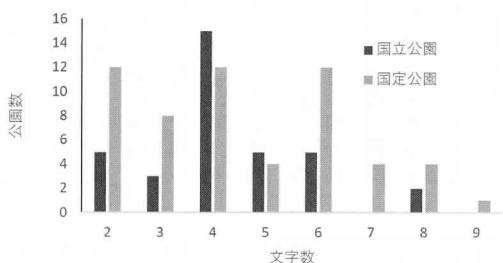


図1 国立・国定公園の名称の文字数(2025年現在)

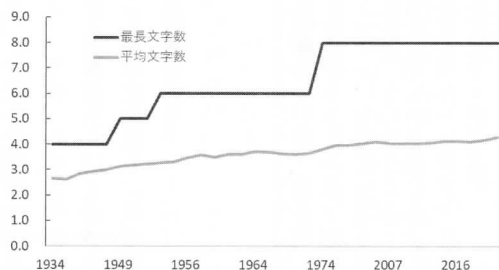


図2 国立公園名の文字数の変遷

いなどの意見があつたが、内務省は最終的に代わる名称を得られず、一般国民からも望まれているこれらの名称を採用した。

【富士箱根(一九三六)】

候補地「富士国立公園」に対し第八回委員会(一九三六)では「箱根」を加え「富士箱根」とすべきだという声が上がった。「富士」だけで十分だとする委員もいたが、箱根が古くから利用者が多く知名度もあり、自然や歴史の成り立ちが富士とは異なるため追加がふさわしいという意見が続出した。内務省は委員会の討議を尊重するよう求められ、最終的には「富士箱根」に決定した。

戦後指定の国立公園名

【富士箱根伊豆（一九五五）】

「富士箱根」の指定二〇周年における公園区域の拡張と同時に名称が「富士箱根伊豆」に改められた。伊豆半島一帯を新規指定ではなく既設公園に包含する方針については、富士と伊豆の景観価値が本質的に異なるという認識のもとで、パークウェイ（道路公園）としての発展を期待した新しい構想だと説明された。名称については、長すぎるという意見もあったが紛糾するに至らず、六文字の「富士箱根伊豆」に決定された。

【南アルプス（一九六四）】

当公園の新規指定は、一九五四年の長野県知事等による陳情から本格的な調査検討が始まった。審議会では「中部山岳の通称北アルプスに対応する、我が国の代表的高山岳地帯で、原始林、高山植物に恵まれる稀重な山岳公園」と説明され、登山者にも南アルプスとして長く親しまれていたことから、アルプスという片仮名に対する反対意見は出なかったと考えられる。

【利尻礼文サロベツ（一九七四）】

一九七一年の審議会答申では、利尻礼文国定公園にサロベツ原野を編入することを条件に国立公園候補地に選定された。戦後のサロベツ原野開発に対して自然保護を求める運動が高まる中で、アイヌ語の「サル・オ・ベツ」（葦原を流れる川）に由来する地名は広く浸透していた。編入を前提にした区域検討が先行し、八文字の名称への反対はなかったと推察される。

【阿蘇くじゅう（一九八六）】

指定当初から阿蘇と九重の両地域にまたがっていた阿蘇国立公園では一九五〇年ごろから大分県側の改称要望が出され、一九六四年に開通した「やまなみハイウェイ」により九重の知名度が急上昇した上、公園面積も熊本県側より大分県側の方が広がっていた。山岳名の「九重」「久住」を巡っては三〇〇年にも及ぶ論争があり、地元には九重町と久住町が併存していたため、国立公園名はその論争を再燃させない「くじゅう」を追加することで改称を実現させた。

【秩父多摩甲斐（二〇〇〇）】

秩父多摩国立公園の名称変更を求める山梨県側の運動は一九八七

年ごろから活発化し「秩父多摩甲斐」を目指して進められていた。その後一九九八年に長野県側からも名称追加要望がなされ、一本化されないまま、指定五〇周年の再検討時の審議会の場で「秩父多摩甲斐」「秩父多摩甲信」「秩父多摩甲斐佐久」三案で議論が行われた。「秩父多摩甲斐佐久」は長すぎた。なじみにくいとまず却下された。「秩父多摩甲斐」は、関係都県の中で山梨県域が面積、利用者数が最多で、再検討において特別地域面積率が他都県より増大していることから賛成意見が多数あった一方、「秩父多摩甲信」は、県域がこれ以上の面積率を有していても名称に反映されていない他公園に波及するおそれがあるとの否定的意見が出された。部会での審議も経て最終的に「秩父多摩甲斐」を適当とする審議会意見がまとめられた。

【妙高戸隠連山（二〇一五）】

上信越高原国立公園から分離独立する際、二県六市町村にまたがる新公園名への地元意見が分かれた。「妙高戸隠」「妙高黒姫戸隠高原」「信越高原」などが提案された審議会での議論の末、イメージしやすく国民に親しまれる「妙高

戸隠」に、山々が密集していることを表す「連山」をつけ「妙高戸隠連山」という名称が決まった。なお、審議会からは「国立公園野尻湖」等の表記で公園名に含まれない資源も積極的に広報して地域活性化に生かすべきとの提案意見も付されている。

おわりに

我が国の国立公園の名称は、本来、明快で簡潔な名称を志向して度々論争が行われてきた。現有と同じ文字数でも長すぎると却下された名称もあり現在に至っている。国立公園の知名度や訴求力が低下している中、今後の公園計画の見直しにあたっては、たゆまず原点に立ち返り簡潔な名称によるブランドインングの強化を祖上に載せていくことが望まれる。

奥山 正樹●おくやま まさき
一九九〇年環境庁（当時）入庁。生物多様性センター長、信越自然環境事務所長などを歴任。鹿児島大学を経て二〇二四年四月から江戸川大学教授、国立公園研究所長。博士（農学）、技術士（総合技術監理・環境部門）。